

行く水

美知代女



四

「お嬢様、多喜子様、さあもうお泣きあそばささないで、ね、ね。」

清子が傍へ寄つて行きますと、お廊下の壁に寄つたまゝ、ちだいを踏んで泣いてゐた多喜子さんは赤地友禪のお被布の上から掛けた純白のエプロンをお眼々にあて、また更に烈しく歔歔ります。

「だつて、だつて、誰も来て呉れないんだもの……」
「御免あそばせ、ね、お嬢様、さあ清々と参りませう。」

やさしくすかして手を執ると、今泣いてゐた鳥が、

もう直ぐ笑つて、

「清やつて、今度新規に來たあなたのお名前なのね、ねえ清や。」

清子は思はず微笑ますには居られませんでした。

「まあ何て、おかあい、お嬢様でせう！」

ひしと抱きかかめて、思ふさま頬摺して見たいとさへ思ひます。

「婆やはね、進ちやん坊ちやんをお寶にするんだつて、そいからね、私とお姉様と、登志ちやんと、皆おいただから嫌だつて、今度つからもう何にもお話をしてあげませんで云つたのよ。」

御用を濟ませたり、お手々を洗つたりする間中、

多喜子さんは不平らしく云ひました。

「ね、ね、清や、清やお話をどつさり知つてるわねえ。」

「え、え、存じてゐますとも、桃太郎さんのお話でも、ちかちか山のお話でも。」

「アラ嫌だ、そんなの男の子のお話だよ。」

「ほ、ほ、では松山鏡でも、指子姫でも。」

「指子姫つてどんなお話？」

「ちよいとく、ねえ、一寸と待つて、頂戴よ、ねえ清や、だつて面白いですもの、姉様達の皆で一緒に聞かして頂戴、ね、ね、好いでせう。」

多喜子さんは清子の袂にぶらさがるやうにして、やたらに清子を引張つて行きました。

以前少女世界に載つてゐたお伽ばなしを思ひ出し、ふとその場の興にまかせて話し初めたその物語が、ひどくお嬢様方のお氣に入つて、今日御奉公にあがつたばかりの清子を取り巻いて、「清や、清や」と皆様大變な騒ぎです。

「お清さん、お清さん、お清さんは何處にゐます？」

ふとお宮の疋走つた聲がして、清子が立ち上らうとした丁度その時、荒々しく間の襖が開かれました。

「あれほど呼んだのに、お前さんでは本當にひどいよ、知らん顔の半兵衛さんを極め込んで、こんな處に隠れてるんだもの、チョツ、お子様を相手に遊んでれば、全く世話がなくなつて樂だわね、だけでもお清さん、御奉公つてものは、そんなものぢやなから



「それはねえお嬢様、むかしある處に、子供の

ないお爺さんお婆さんがゐましてね、如何かして一人子供をおさづけ下さいませうやうにと、一生懸命神様へ御願をかけまして、神様から頂いた芥子粒ほどの種子をお庭にまいて置きますと、やがて虞美人草のやうな綺麗な花が咲いて、その中から、美しい可愛い拇指位の大きさのお姫様が産れて來ましたの。」

うと思つてよ、先刻からお客様はしつきりなく出たり入つたり、やれコーヒード、コ、アだ、おビールだつて、まるでまあ目が廻るやうな騒ぎなんでもおまけに御主人様の方では、今日から一人お小間の手が殖えてるとお思ひになつてゐるから、待て暫しは無い、ドンドン御用を云ひつけて、やかましく御急ぎなさるし、それに私は相變ずの手一つでやつてのけなければならぬんだもの、あゝあ、お蔭ですつかり疲勞れちやつた！」

立て續けに噛みつくやうなあてつけです。

「まあね、御免なさいよ、そんなにお呼び下さつたのに、何故私些少とも聞えなかつたんでせう。」

「フフフ、呼びもしないのに呼んだなんて、私が好き加減な出鱈目を云つたのでせうよ、フフフ、だけでもまさか私はそんな根性強ぢやない事よ。」

お宮はいよいよ不機嫌らしく、恐い目をして其處いらを見廻しました。

「御免よ、私が悪いんだから、ね宮や。」

「又しても多喜子さんのおやさしいこと！ 清子とお宮の顔を見比べながら、あやまるやうに云ひました。」

「清やが悪いんぢやないの、私達が無理にお話をせびつたのがいけないかつたんだわ、ね宮や。」

姉様と登志子さんとが斯う云ひ添えました。

「お黙りあそばせ」睨めつけるやうにして置いて、

「お小間ならお小間らしくするが好いんだわ、お子様附きぢやあるまいし、お子様から取入つて、御主人様のお氣に入らうなんて、どうせ私のやうな馬鹿者には真似も出来ないわ、どれ／＼思ひつきり糞働さして汚れものでも片附けませうよ。」

わざとらしくどさりとどさり足音をさせて、お宮はお臺所の方へ行きました。

「ちよいと御免遊ばせ。」

お嬢様方に會釋して、清子は周章でその跡を追ひました。

「お宮さん、洗ひものは私にさせて下さいな。」

つんと澄して、聞えないふりに行き過ぎようとするのです。

「ね、どうぞ、せめて汚れものだけでも洗はせて頂戴な、ねお宮さん。」

「御勝手に洗ひなすつたら可いでせう。」

ふいと女中部屋の方へお廊下を折れました。

お臺所のお料理臺の上まで運ばれたお下りのお茶器だの小鉢だのを、清子は一つ一つ丁寧に取りあげて、洗場へ取りつけにかゝりました。

「お、お清さん、先刻は有難う、お前さんがお嬢様の御面倒を見てお呉れだもんだから、好い鹽梅におしめ洗ひが片づきました。お天氣の工合が悪いもんだで、一刻も早く洗つて乾すべしと思つても、お宮さんが權柄振つて、お子様に氣いつけて呉れさつしやらないもんだで、どない私一人が難儀する事だか。」

婆やは水口から入つて来るなり、口癖の泣き言を初めるのでした。

「落しなんすなよ、その菓子鉢はそれで大變高價なものぢやさうなでの。」

婆やが注意するのは殆んど同時に、清子の手は最後に残されたその高價な菓子鉢に觸れました。

「アラ！」



思はず清子は驚ろきの聲を挙げました。

「どんねにしななしたい？」

振り返つた婆やは呆れたやうに清子の様子を見守つた。

「アレまあ！」

カチャリとはんの小さな、ものゝから合ふ音もしないで、何時如何して壊れたものか、菓子鉢は二つに破れて、清子の手にはその一片が取られてありました。

不思議、不思議、事不思議を思ふよりも、先づ清子のと胸をついたのは、降つて湧いたこの災難を如何所置したものか——とたい、そればかりを思ひ煩らひました。唇の色はまるでもう紫に變つて、總身わな／＼とおのゝきました。

「何て不思議な事もあるもんだか——でもものしお清さん、それは今破れたもんぢやないらしいで、だつてもお前さん、持つて、取り落とすとか、ものにこち當てるとかしてこそ破れもしようが、何でもなくて」

そんげに眞二つに破れるちう事は、まあま餘まり無い事ぢやと思ふがの……」

或ひは前から破れてゐたものらしい、いや、屹度破れて居たものを、誰かゝそつと此處へ、上手に破れ目をかくして並べて置いたに相違ない——さう云へば先刻からのお宮さんの様子にさうらしいやうな處があつたやうにも思はれる——

清子は斯うも思ひ當りました。ですがすぐ思ひ返して、清子は靜かに眼をつぶつて唇をかみました。

『みんな私の災難だ、仕方がない。』

冷たい双頬を、涙かしと々に傳つて落ちました。

『どうもはや、とんでもない災難で、私どんねに氣の毒だか……』

『婆やさん、私奥様にお詫を申しあげて來ますわ。』

『さう……。仕方がないでう。』

しほくと清子は立つて行きました。御奉行にあがつたばかりの第一日に仕出來した此不調法を、どう云つて詫びたものか、襖の外にとつ、おい、つ、暫ら

くはせき上ぐる涙をかみしめ、泣きました。

『今度のお小間は若いに似合はない子煩悶らしいんで御座いますよ、今朝來たばかりですのに、もう子供がみんな『清や、清や』つて大騒ぎしてますの。』

聞くともなく、清子はおやさしい奥様の言葉を聞ききました。

『さうか、併し何分奉公馴れないと見えて、取次ぎなんかの時、はにかんで困るよ、それに、今少し身装を注意して呉れなくちや。』

『何じすか家が困るらしいんですからね、でわねえ、家のやうに子供が多くては、あんなのでなくてはいけませんわ。』

『それもさうだね、それに溫和しいのが何より好いよ。』

何と云ふ有難い御主人様か！ 清子は又しても不調法の罪を詫び兼ねるやうな、此儘穴にでも入り度

いやうな悲しさに泣きました。

(つづく)